ゆらめくキャンドルの炎

六月二六日（土）午前十時。招待所をあとにし、北京南站へと向かう。いつも南站のバス停から市街地へと向かうバスには乗っていたけれども、駅の敷地に入るのは初めてのことだった。

通りから北京南站に足を踏み入れてみると、汚かった。候車室や售票処の建物も古くて汚れていた。一見した印象では、これまでで最悪。（北京の列車駅は中心駅の北京站を始めとしていくつかの駅が分散して設置されている。首都北京の駅としての整備はそのような事情もあって行き届いてはいないのかもしれない。）敷地のそこここには垢に汚れたような民族服に身を包んだ少数民族の女性たちがなすこともなく立ちつくしたり、座り込んだりしていた。居住区から北京へと出てきたものの、落ち着く先が見つからない人たちなのかもしれない。

しばらく駅の敷地内を行ったり来たりして、見つけた小屋のような售票処で、明日、六月二七日の三〇九次北京南站発天津行きの列車のチケットを買う。南站発は午前六時五〇分。すんなりと購入することができた。列車のチケットを手に入れて、一仕事を終えた気分で心も軽く再び王府井へ。南站から王府井までは二〇路のバスで直通。

王府井はあいかわらずの賑わいだった。繁華街の華やかな雰囲気が僕を誘うけれども、まずは昨日のカメラ・メガネ店で写真の受け取り。写真の受け取りは店先ではなくて、二階の事務室のような所だったので、少々とまどったけれども、無事に写真を受け取ることができた。プリントの値段が前門の写真屋よりもずいぶんと高かったのだけれども、出来上がった写真を見て、納得。鮮やかな出来上がりだった。

しばらく王府井をぶらつき、昼近くなったので適当な食事場所を捜した。マクドナルドという手もあったのだけれども、満員という感じだったし、せっかく北京にいてマクドナルドというのはどうもという気分で歩いていると、通りを少し横道に入ったところに、ファー ストフード風のレストランがあり、その一角が「吉野屋」だった。せっかく北京にいて吉野屋の牛丼、というのも話の種になるかな、と思っていそいそとカウンターへ。牛丼は味噌汁付きで約十元。少々割高だけれども、みごとに日本風の味付けだった。御飯も久しぶりに日本風のほっこり御飯。（確かめたわけではないけれども、中国ではお米の炊き方が日本とは違うらしい。）

久しぶりの日本食（？）に満足して、さて気合を入れて、食品の商場へ。昨日見かけた宮廷風のお菓子をお土産に買うつもりなのだ。

買物客で混雑する商場をぐるっとひとまわりし、適当なセット（僕のような客のためだろうか、何種類かのお菓子の箱をくくり付けてセットを

つくってあった）を物色する。中身も味も分からないので、店員の女性に、
「好吃吗？（おいしいですか）」と尋ね、
「好吃、好吃！」
と店員が請け合ったので、安心して買った。もっとも、おいしいですか、と聞かれて、おいしくないです、と答える店員はいないだろうけれども。
荷物が重くなってしまったので、いったん招待所へと戻った。一階の購買カウンターで買った冷たい缶コーラを飲みながら休憩。（中国語でコーラは「可口可楽」だ。一般にはあまり見かけないが、ホテルや観光地で見かけることもある。中国語には日本語のカタカナにあたる文字がないので、外来語はそれに近い発音の漢字をあてはめて使用するのだけれども、「可口可楽」という中国語はいかにもという感じでおもしろい。）

午後、北京最後の観光として天壇公園を訪れる。
招待所近くの雑貨屋の前を歩いていると、雑貨屋兼闇両替屋のおばさんは、空を仰ぎながら、
「今天、天気、不好（今日は天気が良くないね）」
と言いながら、しかめっつらを向けて見せた。
「不好、不好」
と相槌をうちながら、まんざらでもない気分で歩いていく。それに照りつけるような晴天よりもこの方がよほど過ごしやすいのだ。
天壇公園は永定門の北東に広がる大公園で、南站から前門までの中間あたりに入口がある。いつもの路線バスを天壇のバス停で降り、小道を東に少し歩いていくと、西の門。入場は五角。
天壇というのは、かつて明、清代に皇帝が天に五穀豊穣を祈った所で、祈年殿、皇穹宇、園丘壇、斎宮などの建築物が残されている。特に三層の円盤状の屋根を持つ祈年殿は北京を紹介する写真などでは必ずと言っていいほど取り上げられている。
東門を入場して、公園の道をどこまでも歩いていく（それというのも天壇公園はとても広いのだ。まだかまだかと思いながら歩いていくと、ようやく左方が祈年殿という標識。しばらく歩いて、祈年殿の門に至り、入場は三元（ちなみに外国人は一五元）。
祈年殿はひしめきあうというほどではないが、外国人も含めて観光客で賑わっていた。名高い建築を背景にして、写真を撮りあう人々がいたり、観光客を待ち受ける写真屋さんがいたりして、観光客の人々の少し浮き立ったような気分も相まって、僕の気分もにわかに浮き立っていくのだった。
明代の一四二〇年に建てられ、一八九六年に再建された祈年殿の三層

の建築には釘が一本も使用されていないという。その独特の建築はとても魅力的で、僕は祈年殿の土台となっている円形の高い石段をぐるりとひとまわりし、とっくりとその姿を眺めてから、その内部に足を踏み入れたのだ。

祈年殿の内部には、祭礼の際に神位を安置した神座があり、今初めて目にする異国人としての僕にもなにがしかの聖性を感じさせる。その聖性の源はおそらく『天』と呼ばれるものであり、皇帝のみが『天』の命を受け、『天』と交信もしたのだろうけれども、僕にはその『天』というものを漠然としか理解することはできない。しかしながら皇帝の権威、権力の源としての『天』、その『天』に向かって厳粛な祈りを捧げる皇帝の姿を想像して、思わず僕は『天』の方を仰ぎ見ていたのだった。

祈年殿の近くには皇乾殿があり、そちらの方も覗いたあと、祈年殿の敷地を出て、石畳の道を南の方へと歩いていく。天壇公園は有名な観光地なのだけれども、とても広い公園になっているからか、故宮に比べるとずっとのんびりとした雰囲気が漂っている。

しばらく歩いていくと、皇穹宇への入口があり、入場は三元（中国人）。皇穹宇は祈年殿を一層にしたような円錐形の木造の建築だけれども、ここでは回音壁と呼ばれる皇穹宇を円形に取り囲む灰色の壁が有名だ。壁に向かって小声で囁くと、声は壁を伝わり、一周して聞こえるのだ。何人もの人が壁に耳をあてて、小さな声で囁く姿があった。

皇穹宇の南には真の天壇ともいうべき、園丘がある。広い円形の三層の石壇で、明、清代には毎年冬至の日に皇帝がここに登って『天』にその年の重要な出来事を報告したのだという。数少ない観光客とともに石壇の上に立ったとき、ふと昔日の皇帝の姿が思われ（とは言っても、僕には具体的な皇帝の姿を思い浮かべるほどの知識はないのだけれども）、なにか緊張を感じた。天壇の中心点に立ち、空を仰ぎ見たとき、もちろん僕には何の天命も下ることはなかったけれども、北京の空は白く曇り、どこまでも広がっていたのだ。

ひととおりの見学を終え、公園のベンチでひと休み。ビンの水筒のお茶を飲みながら、煙草を吸った。豊かな樹木のどこかで、セミがしきりに鳴いていた。少し湿った夕風に樹木がざわめく。

北京ももうこれで終わりだと、ふと僕は思う。本当に見なければならないもの、触れておかなければならないことを、見落しているような気がしたけれども、もちろんそれは観光地のことではない。言葉にしようとすると、うまく言えたためしがないようなこと。僕の足もとから砂のようにこぼれ落ちていく『今』ということに対する悔いのような感覚。振り返れば、背後はまるで永遠のように遠い。だが、物思いが深みにはまってしまうの

を振り切るように、僕は立ち上がり、歩き始める。今、その物思いに形を与えようとすれば、どうしようもなく感傷にまとわれてしまうような気がしたからだ。

…明日の天気は大丈夫だろうか。

天壇公園の長い歩道を西の出口の方へと歩いていると、観光客らしき中国人の家族に呼び止められた。

「天壇はどこですか？」

「この道をずっといって、左の方」

公園に入ってからの道程がずいぶんと遠いので、とまどったのだろう。しかし中国人に道を聞かれるとは、僕も中国の風景になじんできたのかもしれない。中国語の受け答えがうまくできたこともあって、僕は少し浮き浮きとしてバス道の方へと歩いていったのだった。

天壇の近くには京劇の天橋劇場があり、時間があれば見ようかと上演時間まで調べたのだけれども、それはパスすることにして、そのまま招待所へと戻った。

招待所のドミトリーの住人は、日本人三人だけになってしまった。メンバーはラサで一緒になった男と、先日北京に到着し、これから西の方へと向かう旅慣れた男。北京に到着した日にいろいろな国からの若者たちでほぼ満員だったことを考えると、まるで宴のあとのように寂しい部屋だ。

誰からということもなく、そろそろ晩飯を食べに行こうか、という話になる。（ここに、三日、夕食時に居あわせた日本人で一緒に晩飯を食べに行く、というのが日課になっている。もちろんみんなひとり旅なので、昼間は基本的に別行動なのだけれども。）

招待所の南にあるちょっと裏寂しい感じのする繁華街で、僕にとっては北京で最後の晩餐というわけだ。お世辞にもこぎれいとは言えないような食堂だけれども、つつきあった何品かの料理は悪くはない。

食堂のテーブルにもたれてよもやま話に花を咲かせていると、突然明かりが消えて、まっ暗になった。停電だ。まっ暗な街路の方からも闇の中で手探りするようなざわめきが聞こえてくる。本格的な停電に出会うのは本当に久しぶりのことだったので、暗闇の中で僕は奇妙な胸のときめきを感じていたのだった。やがて、すぐには復旧しそうにはないと考えたのか、店の女性が慣れた様子で小皿に立てた蝋燭をテーブルに持ってきた。北京の夜、下町の食堂で予期せぬキャンドルサービスだ。もしかしたら北京では停電は珍しいことでもないのかもしれないけれども、テーブルを囲む僕ら三人は、まるで不思議なものを見るようなおももちで、ゆらめく蝋燭の炎を眺めていたのだった。

招待所への帰り道。乏しい月明かりをたよりに、おぼつかない足取りで小道を歩いた。僕はふと、初めて上海に到着した日の夜にドミトリーで一緒になった日本人の男女と一緒に上海を散歩したことを思い出していた。あの夜はもちろん停電ではなかったけれども、初めての中国に緊張し、まるで手探りでもするような心持ちで散歩をしたのだった。あれから二か月が経ち、僕は中国をひとまわりし、旅の終わりに、やはり手探りしている。何も確かにつかめたものなんかないのかもしれないなと、僕は思う。だけれども、そろそろ中国の旅を終えようとするときになって、結局何もつかめなかったということが、暗闇の中をとぼとぼと歩きながら、僕には妙にすがすがしいことのように感じられたのだ。

心配していたけれども、招待所は停電していなかった。明日の朝は少し早いので、カウンターに宿泊カードを返却。服務員から保証金の十元を受け取る。飲まない二人と別れて、購買カウンターで五星啤酒を買った。天津の宿はどうなるか分からないので、今夜は念入りにシャワーを浴びて、ほろ酔いのまにまに長いようで短かった北京の五日間に思いを漂わせるつもりだ。